

# 17 世紀信州上田藩における貫高制の成立過程

—— 上塩尻村諸資料を基にして ——

山 内 太\*

## Abstract

This paper clarifies the process of forming a land system in the ueda domain in the early period on the base of some materials left in the village.

After the Sengoku family became lord of ueda domain, there was no change in the land system for a while. However, from the late 1630s, the Ueda domain began to conduct new land surveys. Its decisive reform was the “Kuraizuke” work in 1645. This reform carried out a precise investigation similar to that of the Kenchi. Based on this research, the new records were created. This reform was an epoch-making reform to establish the early modern land system in the Ueda domain.

Then, in 1699, a small transformation took place. The system established in this series of reforms continued until Chisokaisei which the land tax was revised in the Meiji era.

The ueda feudal lord replaced the Matsudaira family in 1706, but the Matsudaira family did not carry out a new inspection and did not convert to the Kokudaka system. The Matsudaira family took over the system created by Mr. Sengoku. I think that the Matsudaira family did not already feel the need of a new inspection which converted to Kokudaka system.

## はじめに

本論文は、信州上田藩上塩尻村の総合研究の一環として、同村に残された諸資料を参考に、上田藩における近世期の土地所有制度形成過程を明らかにすることを課題としている。

周知のように上田藩は、江戸時代を通じて貫高制を採用し続けたという独特の土地所有制度を持っていた。本論文では、上田藩領内の上塩尻村に残された諸資料から、貫高制を継続した上田藩が、中世的な土地所有制度の在り方から近世的なそれへと、如何に転換していったのかを確認してみたいと考えている。

一般に近世社会における土地所有制度は、「石高制」を基礎として成り立っていると考えられている。この石高制を基礎とする土地制度と比較すると、上田藩の土地制度は、表面的には大きく異なっていた。上田藩では、一筆毎の土地の年貢賦課基準や村高等を、錢貨の単位である貫文によって表示する貫高制が、江戸時代を通じて継続した地域であった。貫高制については、寛政期の地方書である『地方凡例録』<sup>1)</sup>に、「貫

1) 本書には、村方統治の事務的事項が体系的に記述されており、江戸時代の地方書としてもっともすぐれたものの一つとされている。著者は、高崎藩の郡奉行を務めた大石久敬であり、1794年（寛政六）に発刊された。本論では、大石慎三郎校訂版（東京堂出版 1995 年）を用

\* 京都産業大学

高ハ鎌倉將軍の末、京都將軍の始より田地に貫高といふこと始まり、知行領地など此貫高を用ひ東国・西国一統に行ハれしことにて」とあり、また「貫高今も武蔵・相模・上野辺にてハ稀にありて、石高は元よりなく」とされている。そして「慶長以來壺貫を高五石替の勘定になす、然る処武州久良岐郡杉田村にて貫高の割付を見請たるに、永壺貫文を高式石替の積りなり、然れば村に寄り仕来ありて都て五石代とも見えず」<sup>2)</sup>と記されている。地方凡例録に記載されている地方以外にも、東海地方や奥州仙台藩でも貫高制が継続していたことは知られている。やはり『地方凡例録』に記載はないが、信州上田藩でも、貫高制が江戸時代を通じて行われていたのである。

このような上田藩の貫高制を巡っては、主として、「上田藩において検地は行われなかったのか」、また「なぜ石高制へ移行しなかったのか」、という問題意識と共に、多くの研究がなされてきた。早く黒坂周平氏は、上田藩領内に残された多くの土地関係古帳を検討したうえで、真田氏治世期以来上田藩においては、差出検地の痕跡は認められるが、いわゆる丈量検地は実施されなかったこと。そして検地が行われなかったために、貫高表示が踏襲されたと結論付けている<sup>3)</sup>。しかし河内八郎氏は、既に真田氏治世下の上田藩において、貫高制をとりつつも検地が実施されていたこと。そしてその成果としての「見出し」分を合わせた形で、検地によって得られた貫高の数字が、収納高あるいは収納高を定める基準となるものであったとされている<sup>4)</sup>。また平沢清人氏も、既に真田氏時代

の真田昌幸の頃から何回か検地が行われていたとされる。ただしその検地は、貫高制を取り、また兵農分離も十分に行えていなかったため、近世的検地ではなかったと述べられている。そして真田信之藩主時代においても、兵農未分離の貫高制であり、昌幸時代と基本的に違いはないとされる。もっとも近世化は推し進められた、と述べているが<sup>5)</sup>。

さらに堀内泰氏は、貫高制がとられてきたのは、やはり検地がなかったことに由来すると主張された<sup>6)</sup>。その他手塚若子氏は、石高制への移行が年貢増徴に結びつかないことが分かったため、上田藩は石高制に移行しなかったと述べている<sup>7)</sup>。

加えて横山十四男氏は、真田氏が貫高制を採用し続けた理由として、総力戦体制を取るためには貫高制のほうが有利であったという見通しを示した。そしてまた真田信之は検地を行うが、知行地と御料所とで内容的に差があり、その差は「入下」という形で表れたと、「入下」に注目されている。同時に横山氏は、仙石氏時代に行われた「貫慣らし」にも着目され、他領の一般的な検地方式よりもはるかに綿密な実情把握がなされていたと評価されている<sup>8)</sup>。

この「貫慣らし」については、それ以前に内田得平氏が注目されている。氏は、後出する上塩尻村の「田畑位付御帳」という資料も用いながら、一部の村では同一村内における貫高相互の質的不均衡を是正するために、村の作分貫高

---

岩田書院 2014 年)

- 5) 平沢清人「真田昌幸時代上田領の貫文制と秀吉の検地」(『地方史研究』108 号 1969 年)、「真田信之時代上田領の貫文制」(『信濃』22 巻 7 号 1970 年)
- 6) 堀内泰氏「上田領の貫高制についての一考察」(『千曲』25 号 1980 年)
- 7) 手塚若子「上田領における貫高制と石高制」(『千曲』79 号 1993 年)
- 8) 横山十四男氏「上田藩の貫高制」(一)、(二)(『信濃』44 巻 2 号、3 号 1992 年)

---

いた。

2) 上記同 32-34 頁

3) 上田小県誌刊行会『上田小県誌 第二巻歴史編下』(小県上田教育会 1960 年)第二章第二節

4) 河内八郎「真田氏の領国形成過程」(丸山和洋編『戦国大名と国衆 14 真田氏一門と家臣』

を村内全田畑に再配分する徹底した方法＝「村慣し位付」が行われたとされている。そして上田藩貫高制における唯一の基本土地台帳であったといえる「承応貫高帳」記載の貫高が、貫慣らしによる一応の是正を経てきていることを指摘した。また氏は、貫高相互の不均衡を是正する村慣らしのもう一つの方式として、「場詰入下立」の方式をあげ、「村慣し位付」方式に比べて修正的な方式だとした。そしてこれらの村慣らしによって、幕末まで続く上田藩貫高制下村々の作分高の基礎が定まったとされている<sup>9)</sup>。

しかし貫慣らしの存在に着目されながら、横山氏は、その実情把握が村ごとの内部的作業であり、内部情報に過ぎなかった点を強調される。また内田氏も、貫高の設定が等質化され、貫高制の基礎が定まったとされる一方、近世的なものへと進まなかったとその限界を指摘されている。両氏は、貫高制の特殊性、石高制との違い、近世＝石高制というイメージを過度に意識しすぎたため、貫慣らしを正当に評価することができなかったように感じられる。本論では、この貫慣らしを新たな視点で捉えなおしてみたいと考えている。

近年では、『真田氏給人知行検地帳』の発見、桜井松夫氏の研究により、真田氏による検地の実施が明らかになった。また桜井氏は、真田氏の年貢高が非常に高率なものであり、それが、真田氏が貫高制を採用し続けた理由であると指摘している<sup>10)</sup>。さらに鈴木将典氏は、上田藩において、石高制と貫高制の二重構造の下で支配が行われていたと主張されている<sup>11)</sup>。極めて興

味深い見解であるといえる。

その上で丸島和洋氏は、真田氏の領国であった上野沼田領における研究も踏まえ、石高制移行と年貢収入の問題は切り離して考えたほうが良いと述べられている。そして石高制と貫高制との間に、丈量検地や兵農分離の有無や、在地掌握における差異があったと証明されてはいないとされ、貫高制と石高制を分けて考える必要はないと主張される<sup>12)</sup>。

本論文では、これら近年の先行研究を前提に、上塩尻村に残された諸資料を用いて、17世紀上田藩領内において、如何なる土地所有制度改革が行われていたのか、という課題に迫りたい。

## 1 寛永十三年「田畑貫高御帳」について

上塩尻村において、最も古い情報を与えてくれる土地関係史料は、今のところ、「慶長年中古帳一冊貫高 元和年中 直帳一冊石盛高合帳」である<sup>13)</sup>。もちろんこの現存する資料は、後の時代の写しと考えられるが、この資料によると、上塩尻村の村高は、既に300貫250文と設定されている<sup>14)</sup>。

次いで元和二年(1616)「御高帳」とされる史料がある<sup>15)</sup>。この資料も後世の写しであるし、また村全体の高を記載していないように感じられる。加えて未だ十分にこの資料の示しているものを理解できていないのであるが、しかしこの資料の記載方式には少々気になる点もあるの

諸領主時代の仙石氏による検地と貫高制について論じた論稿（鈴木将典「仙石氏の信州佐久郡支配と貫高制」駒沢史学90号2018年）もある。

9) 内田得平氏の「上田藩貫高制における貫慣し」（『信濃』19巻10号1967年）

10) 桜井松夫「真田氏の貫高制と貢租」『上田市誌 歴史編（9）近世の農民生活と騒動』（2003年）。

11) 鈴木将典「豊臣政権下の信濃検地と石高制」（『信濃』62巻3号2010年）。氏にはまた、小

12) 丸島和洋「総論 真田氏家臣団の基礎研究」（丸島前掲書2014年）。

13) 藤本蚕業歴史館資料 III-1-1-26

14) 従って当然これより以前、真田氏治世下において、何らかの土地調査、検地が行われていたであろうことが推測される。

15) 馬場直次郎家文書196

で、以下にその一部を書き出してみたい。

立石	八百拾文	弥三郎
かいと	八百拾文	〃
ときわ	五百五拾文	〃
	合貳貫百七十文	田方
あらや	百貳十文	六助分 〃
		〃
屋鋪	六十文	〃
	合百八拾文	畑方
ひい田	八百四拾七文	勘左衛門
丸田	五百六十八文	〃
	合壹貫四百拾五文	田方
屋鋪	百四十文	〃
越畑	百貳拾文	〃
同	拾文	繁助分 〃
	合貳百九十八文	畑方

基本的にこの帳面は、村内のすべての土地を字名ごとに一筆ごとと並んで記載する検地帳のような記載方式というよりは、名請け人と思われる人物ごとに、田畑別に名請け地が書き上げられている名寄帳形式での記載である。田畑別に一筆ごと<sup>16)</sup>、字名、貫高、それに人名が記載されている。ただし、この一筆ごとに記載されている土地の中には、名請け人の前に、何某分という記載があることが目を引く。先の資料で言えば、「六助分」や「繁助分」である。これは、この資料が作成された段階、この資料を作成した調査においては、恐らく土地に対する重層的

16) 本論における1筆とは、その貫高を設定した一纏まりの土地を意味している。従って、この貫高が設定された耕地の一纏まりの土地の中に、複数枚の田畑地が属することもあり得る。つまり、この貫高が附された1筆は、実際の田畑を複数枚抱合した一纏まりの単位であると言える。

な関係を一掃することが未だできず、その継続する関係がそのままこの資料に記載されていたのではないかと考えられる。

この元和二年(1616)は、真田信之によって、検地条目が出されたとされる年であった<sup>17)</sup>。上塩尻村においても、「段々と開発致畑起帰真田伊豆守様御代御竿請之節字利根嶋と相改」<sup>18)</sup>と記載された資料が残されている。信之の時代に、上田藩において検地が行われていたことをうかがわせる。上記元和二年「御高帳」の元帳は、この検地の際に作成されたものなのかもしれない。ただしたとえ検地が行われていたとしても、この検地は、石高制を志向するような検地ではなく、また土地に関する重層的な権利関係をそのまま記載するような、その意味で前近世的な検地であったと言えるだろう。

さらに上塩尻村には、現在現物を確認することはできないが、元和三年「真田家御代塩尻組郷高帳」が存在していた<sup>19)</sup>。この資料には、上塩尻村の村高が、300貫250文とされ、入下74貫179文、永川成33貫666文、不作520文、大道成15貫90文、せき免500文、きもいり免1貫文、蔵敷100文、寺社領1貫100文、残高174貫95文と記されていたという。

その後元和八年(1622)に真田氏に代わって仙石氏が上田に入ってきた際、幕府代官高室金兵衛から引き渡されたとされる「信州小県郡上田領並川中島石高帳」に記載される上塩尻村の村高も、やはり300貫250文であった。この

17) 『長野県史 近世史料編第一巻(一) 東信地方』242頁「真田信之検地条目」

18) 馬場直次郎家文書206 この資料は、上塩尻村の本宿集落の再興について記された資料である。文禄四年の満水によって本宿集落は壊滅し、家々は流されてしまったのだが、引用のように、その後畑地が起帰され、竿請けを受けたと言っているのがあった。

19) 原家文書293-3 この資料には、表紙のみが残されている。内容は、上記『上田小県誌』214・215頁によっている。

300 貫 250 文が、幕末まで上塩尻村の公的な表高となる<sup>20)</sup>。

次に古い資料は、真田氏に代わって仙石氏が上田藩主となっていた、寛永十三年（1636）の年号が記された「田畑貫高御帳」（以下寛永資料と略）である<sup>21)</sup>。この寛永資料では、名寄せ形式による田畑一筆毎の記載がなされている。先に紹介した「御高帳」と比べると、名寄帳形式であり田畑一筆毎の記載である点において類似していた。またこの寛永資料には、名請け人として 59 名存在していた。この名請け人たちは、ある程度大きな貫高を名請する人々であった。ただし入作者が 11 人（18.6%）、存在していた。さらにこの資料を詳しく検討してみると、この 59 名のうち、その冒頭の名前の脇に、肩書のように様々な名称が付されている名請人が存在した。例えば、何某「分」と記載された名請け人が 4 名<sup>22)</sup>、誰某「ひかへ小作」、「ひかへ之内小作」、「ひかへ」と記載された名請け人は 10 名、誰某「小作」と記載された名請け人が 1 名存在していた。そこでまず、「助之丞ひかへ

之内小作 佐次右衛門」の記載を抜き書きしてみよう。

こし田	助之丞ひかへ之内小作
一 九百拾文	佐次右衛門
	内百八十式文入下
嶋崎	
一 七百九十式文	同人
同所	
一 六百九拾文	同人
	内式百九十文入下
屋敷	
一 六拾文	同人
川原畑	
一 六拾四文	同人
嶋崎	
一 八拾四文	同人
鍵田	
一 七百九拾四文	同人
	内三百九十文入下
たて石	
一 八百五拾文	同人
	内式百文入下
合四貫式百五拾文	
	内壺貫六十式文入下
残る	
	三貫百八拾八文 納り
	（佐藤嘉三郎家文書Ⅰ2「田畑貫高御帳」）

以上のように、佐次右衛門は、助之丞のひかへ小作と記載されながら、名請け人として貫高帳に記載されているわけである。つまり村において年貢負担者として公認され、記載されていたのである。この「ひかへ」とは、「所持し領する手作の意なるべし」とされている<sup>23)</sup>。これは、名請け人の他に、それぞれの土地に対して

20) 馬場直次郎家文書 33 より。この資料は表書きに「元和八壬戌年八月 信濃國小縣郡上田領高帳 正保二乙酉年処寫 石笛文庫」と記載されており、明治五年に原与左衛門がさらに書き写したとする資料である。ちなみに宝永三年（1706）の松平氏入封時の免相を見ると、上塩尻村の表高はやはり 300 貫 250 文となっているが、すでに 102 貫 224 文は「万引物」とされ、年貢賦課対象から除外されていた。これ以後幕末まで、免相の最初に上塩尻村の貫高として 300 貫 250 文が記載され、そこから各年代における「永引」高が引かれていき、その後に実際に年貢が賦課される貫高が記載されていた。長谷部他編『近世日本の地域社会と共同性』（刀水書房 2009 年）第二章第三節も参照して欲しい。

21) 佐藤嘉三郎家文書Ⅰ2 これの元帳は藤本蚕業歴史館に保管されている。

22) この名請け人のうちの一人は、入作者であった。

23) 上野尚志『信濃國小縣郡年表』（復刻版）（上小郷土研究会 1979 年）91 頁。以下「年表」と略す。



何らかの権利を有するもう一人の人物が存在していたということを意味していよう。しかもその存在が、年貢賦課のための基本資料である貫高帳にまで記載されていることに、注目しておきたい。あるいは逆に「小作」と記載されている佐次右衛門のような人物が、年貢賦課徴収に関わる公的な帳面である「貫高御帳」に名前を記載されるようになったということは、佐次右衛門のような人物たちの土地に対する影響力が、増しているということであろう。いずれにせよこの段階では、土地に関する重層的な権利関係が残存し、それが公的な資料にも姿を現していたのである。

ところで、ここであげた助之丞のような人物をここでは「控え主」と呼ぶことにするが、この控え主の小作人として名請け人に名を連ねている人物が、先に述べたように 10 名存在し、名請け人の約 1/6 を占めていた。しかもこのような控え主は助之丞の他にも存在し、都合 8 名を数えた。そのうち 1 名は名請け人としては記載が無いが、残りの 7 名は名請け人としても記載されていた。そして彼ら 8 名の控え主としての貫高は、村全体の貫高の 16.7% を占めていた。

例えば上記の「助之丞」は、自ら貫高 8 貫 337 文を名請けしながら、佐次右衛門の他にも 2 名の「ひかへ小作」を抱えており、自ら名請する貫高と控え主としての貫高を合わせると、その貫高は 20 貫 501 文にのぼり、村全体の貫高の 8.3% にあたった。控え主としての高も、彼自身の名請高と合わせた高も、「助之丞」は、村一番の貫高持ちであった。その他弥三郎は、彼自身の名請け高は 4 貫 455 文であったが、控え主として 1 名の名請け人を抱え、その貫高は 4 貫 825 文であり、合計貫高は 9 貫 280 文であった。ただし弥三郎には「ひかへ」の附かない「小作」を 1 名抱えており、彼の名請する貫高を加えると、14 貫 876 文となった。

また自ら名請する貫高のほうを抱え主としての貫高よりも多かった抱え主が、5 名存在し

た<sup>24)</sup>。このうち最大の名請け人は、九右衛門である。彼の名請け高は、13 貫 868 文であり、抱え主としての高 2 貫 160 文よりはるかに多かった。このように多様な彼ら 8 名の抱え主の、抱え主としての貫高と 7 名の抱え主自身の名請高を合わせると、村全体の貫高の 37.4% となる。彼ら抱え主が、上塩尻村に占めた影響力の大きさをうかがわせる。

さらに肩書に「分」という記載が付いた名請け人も 4 名存在していた。例えば以下のような記載である。

辻田	新蔵分
一 四百四拾四文	小右衛門
上口	
一 七百三拾八文	内仁百六十文入下 同人
こし田	
一 八百三拾文	内三百四文入下 同人
(以下略)	

またこの新蔵も名請しているのであるが、その記載は以下のようであった。

むら田	介右衛門ひかへ
一 壹貫百貳文	新蔵
	内三百五十文入下
にゅうしぶ田	
一 百拾文	同人
(中略)	
こし田	
一 四拾八文	内貳十四文 忠兵衛作
(以下略)	同人

新蔵は、合計 3 貫 651 文を名請けしていたの

24) 村内に名請地を持たない里兵衛を含む。

であるが、肩書には、「介右衛門ひかへ」という記載が附されていた。つまり新蔵は、介右衛門を抱え主とする名請け人であり、かつ小右衛門を分付けする、分付け主でもあったということになる。しかもこの新蔵名請地のうち「こし田」の半分については、忠兵衛が作っていたというのである。そして忠兵衛は、この寛永資料には、控え主のいない名請け人として名前が記載されていた。極めて錯綜した権利関係が、わざわざ貫高帳にまで記載されていたことが分かる。

さらに複雑なことに、土地1筆毎に、「分」という記載があった。例えば以下のような例である。

しまさき		
一 壱貫三百七拾文	内四百文入下	茂左衛門
すなはら		
一 四百五拾文		同人
六反田		
一 壱貫文	内貳百五十文入下	同人
同所		
一 五百文		同人
ひがしうら		
一 五百貳拾文	内貳百五十門入下	同人
かぎ田		
一 八百三拾文	内貳百三十文入下	同人
よこせき		
一 五百文	才三分	同人
同所		
一 四百五拾文	甚四郎分	同人
せきしよ		
一 壱貫貳百文	内三百五十文入下	同人
丸田		
一 壱貫文	内貳百五十文入下	同人
やしき		
一 五拾八文		同人

合七貫八百七拾八  
内壱貫六百八十五文入下

控え主を持たない茂左衛門という人物の名請け地、横堰 500 文の田地に、金井村から入作し名請けしていた才蔵分という記載がつけられ、また横堰 450 文の田地にも、抱え主のいない名請け人である甚四郎分という記載があった。茂左衛門の一部の名請けについては、他に参与する人物が存在する土地であるということを、年貢を賦課するための帳面である貫高帳に、わざわざ記載されていたということである。

以上のように、この段階では未だ、土地に対する錯綜した権利関係、土地をめぐる重層的な諸関係が、そのまま貫高帳に記載されていた。この点で寛永資料は、未だ中世的な色彩を保ったままの、土地に対する重層的な社会関係がそのまま表示された資料、前近世的な資料であったと言える。

さらに元和二年「御高帳」記載の上述勘左衛門の持ち高を、寛永資料記載の同名の名請け人と比較してみると、田一筆の貫高が異なっていることと、後者には新たな田一筆が加わっていることを除くと、字名、貫高とも同じであった<sup>25)</sup>。基本的に前者から後者にかけて、大きな土地調査が行われ、貫高の組み換えが行われていたとは考え難い。

加えて寛永資料中には、一筆一筆の記載田畑に、「入下」という言葉が散見された。例えば上記佐次右衛門の場合、八筆中四筆で入下の記載が見られる。そして合計貫高においも、入下貫高総計を計算し、それを総貫高から引いて、残りに年貢を賦課している。この「入下」については、『信濃國小縣郡年表』に、「入下と称するは米値土地の変遷等により収入し能はざるも

25) 「御高帳」で「繁助分」と記されていた「越畑 10 文」は、分付記載がなくなり、そのまま記載されていた。

のは貫額の内を減し下げ農人に与ふる」<sup>26)</sup> という記載がある。また同書の別の箇所には、「時勢の変遷に随ひ実地民力に堪えざるか、又事故ありて過税なるを以て免助せし高を云なるべし」<sup>27)</sup> とある。『上田小県誌』はその中で、「作毛その他を斟酌して租税対象からはずした土地と考えられる」<sup>28)</sup> と指摘している。さらに『上田市誌』においても、「入下は、不作の引分ではなく、百姓の一枚一枚の田畑について、年貢の納入が不可能と認められる田畑に限り、一定期間年貢の対象からはずした田畑を指すもの」<sup>29)</sup> と指摘している。上塩尻村の資料からも、入下とは、一筆毎の田畑に対して、その状況に合わせて一定期間年貢負担を調整・減免する仕組みであったといえる。

この入下貫高の総高は、村全体の貫高の約 29.0% に上っていた。上述の控え主たちが控え主として関与する貫高に占める入下貫高の割合も、28.5% であった。

このような入下記載は、上述「真田家御代塩尻組郷高帳」にも記載されていた。しかもこの「真田家御代塩尻組郷高帳」に記載された村高 300 貫 250 文、入下 74 貫 179 文、永川成 33 貫 666 文、不作 520 文、大道成 15 貫 90 文、せき免 500 文、きもいり免 1 貫文、蔵敷 100 文、寺社領 1 貫 100 文、残高 174 貫 95 文は、全て寛永資料末尾に記載された数字と同じであった<sup>30)</sup>。そしてこの 174 貫 95 文に年貢が賦課されるわけである。

上記を勘案すると、このような入下を含む記

載方法は、真田氏支配下において既にみられていた<sup>31)</sup>。そして「御高帳」と寛永資料において貫高の大きな変更が見受けられないことを考えると、仙石氏入国後 14 年を経た寛永十三年においても、未だ土地所有制度・年貢徴収制度は、基本的に真田領主時代の仕法を継承していたと考えられる。つまり真田氏治世下において行われた検地をもとに、「御高帳」や上述元和三年「真田家御代塩尻組郷高帳」が作成され、またその後、仙石氏入封後に寛永貫高帳が作成されたと考えられるのである。そしてこの仕組みを大きく変革するのが、以下で述べる田畑位付け、貫慣らしと新たな貫高帳の作成ということになるのだろう。

## 2 「田畑位付御帳」について

寛永貫高帳の次に残された資料には、『正保二年乙酉十月十六日 田畑位付御帳』(1645)<sup>32)</sup> がある(以下正保資料と略)。この正保資料は、仙石氏時代における土地改革の貴重な情報を残していると考えられる。この資料中には、字ごとに村内一筆毎の田畑が書き上げられ、それぞれに字名、田畑等の種目、品位、坪面積、貫文、名請人名が記載されていた。しかもどうやら上田、中田等の種目・品位ごとに 100 坪を基準とし、それを元に貫高を各々の田畑に設定したと考えられるのである。まさに検地で行われるこ

26) 『年表』100 頁

27) 前掲『年表』131 頁。

28) 上記『上田小県誌』206 頁。

29) 上田市誌編纂委員会『上田市誌 近世の農  
民生活と騒動、歴史編 9』(上田市誌刊行会  
2003 年)14 頁。

30) 寛永七年の免相においても、上塩尻村の村  
高は 300 貫 250 文であり、入下以下から本作  
分 174 貫 95 文まで、まったく同じ数字であっ  
た(藤本蚕業歴史館資料 III-5-1-36)。

31) 黒坂氏の研究によると、上塩尻村以外の村々  
に残された真田氏時代の土地資料においても、  
入下の記載がすでに記されている。ただし元和  
二年「御高帳」には、入下記載はない。入下を  
引く前の貫高が記載されている。

32) この資料は、現在いずれも後世の写しである  
が、二冊確認されている。一つは、藤本蚕業  
歴史館に所蔵されている資料(藤本蚕業歴史館  
資料 III-1-1-25)であり、もう一つは上田市博  
物館に所蔵されている資料(佐藤嘉三郎家文書  
I 4)である。



とと同等のことが行われていたといえよう<sup>33)</sup>。そしてもはや入下の記載はなくなっている。

さらにこの帳面の末尾には、「此御帳者正保二年御縄帳写、但仙石越前守様御国替之刻松平伊賀守様江御引渡之帳也、御当家上田へ御入城之後此通清帳いたし差上ル、本縄帳者上田領一円二仙石氏へ御取上のよし申伝候」と記載されている<sup>34)</sup>。つまりこれは、検地帳ともいえる縄帳の写しであり、原本の縄帳は、仙石氏が上田領の村々から取り上げたと言い伝えられているというのである。従って正保二年に仙石氏は、石直しはしなかったが検地を行ったと考えられるのである。

それゆえ位付とは、貫高相互の不均衡を是正するために、村内の一筆ごとの土地を評価したうえで、一定の基準の下に、改めて貫付けを行い、各々の土地に貫高を再設定しながら貫高を村内各土地へ再配分したことであった。土地毎の貫高の高低をならしたということなる。

このように上田藩では、正保二年前後に、石直しは行われていなかったが、丈量に基づく検地が行われていたと考えられる<sup>35)</sup>。この正保二年の免相（年貢割賦状）が、上塩尻村には残されている。これによると、204貫614文が上塩尻村の作高（年貢賦課高）となり、正保資料の総貫高と一致していた<sup>36)</sup>。この免相によると、300貫250文の村高から「八十七貫五百四十七

文 辰之年迄万引物」、「七貫九百三十九文 未之年永川成」、「百五十文 申之年永川成」を引くと、204貫614文と、正保資料の総貫高に一致する。それ故前年の正保元年申年の永川成分までの利用不適切地分の貫高を控除した上で、改めて正保元年時点で、残りの貫高、つまり204貫614文を各土地に割り付けられたのだと考えられる。

### 3 「貫付ならし之御帳」についての分析

続いて上塩尻村には、この「位付」貫ならしが行われた後の慶安元年（1648）と記された「貫付ならし御帳」<sup>37)</sup>という資料がある（以下慶安資料と略）<sup>38)</sup>。この慶安資料は、名寄帳形式を取り、貫高名請け人毎に、名請け人の田畑が一筆ごとに、字名と貫高が書き上げられていた。そして正保二年資料と同様、慶安元年の資料にも、もはや入下の記載はなくなっている。また「ひかへ」や「ひかへ小作」という記載も消滅する。

それゆえ貫慣らし作業を通じて、土地に対する重層的な権利関係が一定程度整理されたとはいえる。しかし後述するようにこの資料には、依然名請け人以外の情報も記載されていた。土地に対する複雑な権利関係が完全に払しょくされ、それを公的な記録に残さないようにはなっていないわけである。しかし少なくとも「ひかへ」記載は無くなっており、その意味で、従来の複雑な土地に対する権利や中間搾取を排除した、一定の権利関係の整理が、帳面上は行われていたと言える。

翌慶安二年の免相においては、総貫高は204

33) 上田藩内では1貫文の土地が、おおよそ田が500坪から1,500坪、畑で700坪から2,000坪とされていた（前掲『年表』178-179頁）。

34) 佐藤嘉平次家文書I4

35) 庄屋用事集という資料に、「正保之頃田畑上・中・下之位を分て名所并上田何百文・中畑何百文と申様二田畑共一筆限之水帳を写持居たるものを所々ニ而見請たる事あり、これ正保之頃下方二而改たるものと見へたり」（『長野県史近世史料編第一巻（一）東信地方』593頁）としているのは、この作業、資料の事を指していると考えられる。

36) 馬場直次郎家文書175

37) 佐藤嘉平次家文書I5

38) この資料も現在上塩尻村には二種類存在している。一つは、藤本蚕業歴史館に所蔵されている資料（藤本蚕業歴史館資料III-1-1-2）であり、こちらが原本と思われる。そして写しとして上田市博物館に所蔵されている資料（佐藤嘉三郎家文書I5）が存在する。

貫 614 文が本作分（年貢賦課高）となっていた<sup>39)</sup>。寛永資料に記載されていた村高よりも大幅に減少してはいたが、しかし入下等を除いた年貢賦課高である 174 貫 95 文よりも多くなっている。但し村高は変わらず 300 貫 250 文であり、そこから万引物、永川成等として貫高が免除され、最終的に作分として 204 貫 614 文が再設定されていた。やはり仙石氏は、石直しは行わなかったが、独自の年貢賦課基準を基に、新たに一筆ごとの土地に貫高を再設定しているのである。しかも年貢賦課高は、寛永資料に比べて大幅に増加している。藩は、貫慣らしを行ったことによって、年貢増徴に成功していたとも言えるだろう<sup>40)</sup>。

しかもこれは上塩尻村のみの動向ではないようである。前掲『年表』には、「中之條村寛永年間村ならし位付凡そ百歩に付麦上田四百四十八文中四百八文下三百六十八文（以下略）」<sup>41)</sup>という記述がみられる。また『上田小県誌』の記述によると、石神村に残された古文書「元和九年石神御本帳」には、未だ入下表記や分付表記がなされていたが、同村「寛永二十年御本帳」においては、それらの記載が消滅していたこと。同じく小牧村「元和九年古帳」では見られた「かかい」や入下の表記が、同村「寛永二十一年名寄御帳」においては、いずれも消滅していたという<sup>42)</sup>。上塩尻村に寛永資料が残されていること、並びに寛永十四年に初めて「田畑切起改帳」が作成されていることも鑑みると<sup>43)</sup>、仙石氏は、寛永時代後半から土地調査に

乗り出し、正保時代から慶安時代にかけて進展させていったのではないかと考えられる<sup>44)</sup>。

ここで、正保資料と慶安資料を対比するため、両資料中に名請け人として共に名前が記載されている六兵衛名請地を、それぞれの資料から抜粋してみる。

正保資料

同所（さかい—引用者）

春一上田 百三十九歩 四百八十四文

六兵衛

（中略）

同所（さかい—引用者）

麦一中田 九拾六歩 四百拾壺文 六兵衛

同所

麦一下田 九拾六歩 三百八拾五文 同人

同所

麦一中田 百三拾八歩 九百九拾一文 同人

（中略）

同所（大おさた—引用者注）

---

設定した土地と、それ以外の年貢賦課地が存在していた。この貫高地以外の年貢賦課地は、切起地と呼ばれた。「切起」というのは、新たに開墾した耕地を意味していた。この切起地については石高が設定され、石高に基づいて年貢が賦課された。寛永十四年「田畑切起改帳」は、検地帳形式で記載されており、村内の切起地一筆ずつに、字名、種別、品位、面積、石高、名請人名が記載されていた。従って仙石氏は、この頃少なくとも貫高が設定されていなかった新開地については、検地を行っていたといえる。このことについては、既に内田氏が前出論文にて同様のことを指摘している。

44) 上塩尻村には、慶安二年（1649）にも「田畑切起改帳」が作成されている。この資料においても、検地帳形式での記載がなされていた。寛永から正保、慶安と土地調査が続けられたのではないだろうか。上塩尻村では、寛文十二年（1672）の「田畑切起改帳」を最後に、切起地における検地帳形式の資料は作成されなくなる。

39) 馬場直次郎家文書 176

40) 百姓作高 1 貫文につき、初 7 俵をかけて上納高を算出するが、実際には、ここから当免を引き、減額する。寛永資料では、最終的な上納高は 1,140 俵となっていた。対して慶安二年免相では、当免を引いても上納高は 1,200 俵であった。

41) 前掲『年表』137 頁

42) 『上田小県誌』338-349 頁

43) 上塩尻村には、これまで述べてきた貫高を

麦一上田 百六歩 四百八拾貳文 六兵衛  
同所

麦一下田 百七歩 四百一文 同人  
(中略)

すなはら

麦一中田 五拾五歩 百七拾七文 六兵衛  
(中略)

きたかわ

春一下田三ヶ 八拾九歩 貳百六拾三文  
六兵衛  
(中略)

同所 (宮之前一引用者注)

麦一下田 五拾四歩 貳百十七文 六兵衛  
同所

春一下田 拾壹歩 三拾貳文 六兵衛  
(中略)

川者た

麦一下田 百四拾八歩 四百三拾七文  
六兵衛

同所

麦一下田 貳十七歩 七十三文 同人  
(中略)

同所 (やしき一引用者注)

一下 四拾壹歩 七十四文 六兵衛  
(中略)

同所 (ざま一引用者注)

一下下畑 十八歩 十四文 六兵衛  
(中略)

同所 (ざま一引用者注)

一下畑 八十五歩 百拾六歩 六兵衛  
(中略)

同所 (とねしま一引用者注)

一下畑 六拾六歩 九拾文 六兵衛  
同所

一下畑 六十九歩 九十四文  
(中略)

同所 (すなはら一引用者注)

一下畑 六十五歩 八十九文 六兵衛  
(中略)

すなはら

一下下畑 八歩 六文 六兵衛  
(中略)

(佐藤嘉三郎家文書 I 4)

となり、合計は 19 筆、4 貫 836 文となった。

次に慶安資料中の六兵衛名義の記載内容を書き上げてみる。

慶安資料

さかいノ田

四百八拾四文

六兵衛

同所

七百九拾六文

同人

すなはらノ田

八百三拾文

同人

きたかわ田

七百五拾文

同人

すなはらノ田

百七拾七文

同人

宮ノ前ノ田

貳百四拾九文

同人

上口ノ田

四百三拾七文

同人

同所ノ田

七拾三文

同人

やしき

七拾四文

同人

ざまノはた

拾四文

同人

みろくたうノ畑

百拾六文

同人

とねしまノはた

九拾文

同人

同所

九拾四文

同人

すなはら

八拾九文

同人

同所

六文

同人

こしはた  
 四文 同人  
 ㄨ四貫貳百八拾三文  
 (佐藤嘉三郎家文書 I 5)

正保資料とその3年後に作成された慶安資料とを比べてみると、六兵衛の名請高は、正保資料時の19筆から16筆に減少している。また貫高も4貫836文から4貫283文に減少している。中身を詳しく見ると、正保資料中の一つ目、「さかい 484 文」の田は、慶安資料中にも記載が見える。また正保資料中の二つ目と三つ目、「さかい 411 文」「さかい 385 文」の土地は、合わさって慶安資料中の「さかい 796 文」の土地に当たるのであろう。以下両資料の六兵衛持地を比べると、正保期の19筆のうち15筆が、慶安期と貫高が同じ土地であった。

正保資料の総貫高は204貫614文であり、慶安資料の百姓作り高は204貫625文となっていた<sup>45)</sup>。これらのことから、上述のように貫高位付けの記録、まさに検地帳が正保資料であり、この記録を下に、各名請人の所有地を一筆ごと名寄せ形式にてまとめたものが、慶安資料であったと考えられる。そしてその名称は、貫ならしの結果を名寄せした帳面であることから付けられたのかもしれない。

#### 4 「田畑貫高御帳」, 「古水帳」の分析

その後上塩尻村には、「承応五巳年(ママ)貫高帳」(1653 or 1656)が残されている(以下「承応資料」とする)<sup>46)</sup>。さらに明暦四年(1658)に作成されたと考えられる資料も存在している

45) 前述のように、慶安二年の免相には、百姓作分が204貫614文となっており、慶安資料と10文の差がある。この差の発生理由については、現在よく分かっていない。

46) 佐藤嘉平次 I 6。この他にも、藤本蚕業歴史館にも同内容の資料が保管されている。

(以下「明暦資料」とする)<sup>47)</sup>。これらはいずれも名寄せ形式の田畑書き上げ帳であった。そこで、同じ名寄せ形式である慶安資料、承応資料、明暦資料の三帳を六兵衛持高で比較してみるために、以下に承応資料、明暦資料の六兵衛持高を書き上げてみる。

#### 承応貫高帳

さかいノ田 長七ツ	
壱貫五百貳拾九文	六兵衛
すなはら 長三ツ	
九百六拾文	同人
北川田 長二ツ	
九百貳拾七文	同人
上口ノ田 長九ツ	
五百拾文	同人
ㄨ三貫九百貳拾六文	
とねしま	
百八拾四文	同人
やしき	
七拾四文	同人
すなはら	
九拾九文	同人

47) 馬場直次郎家文書 32 この資料は、袋表に「明暦四年古水帳 原与左衛門」という記載があり、袋裏には「明暦四年二月改元萬治元年戊戌而距今明治二年己巳凡二百十二年也 原昌言識」という記載がある。また表紙には「上塩尻村中 明暦四年 御長」と記載されている。そして資料中の最後には、「惣百姓中」という記載で終わっている。その左ページには、異なる字体にて、「明暦四年戌之年と享保十四年酉之年迄七拾二年ニ成ル」という記載がある。恐らくこの資料は、明暦四年に作成され、その後次の貫高帳が作成される享保十四年まで用いられたものだったのではないだろうか。そして明治に入り原昌言が、改めてこの資料を整理したのではないかと推定できる。

なお『小県誌』189頁には、上塩尻村に「明暦四年貫高帳」の記載があるが、恐らくこの資料を指しているのではないと思われる。

メ三百五拾七文  
田畑合四貫貳百八拾三文

(佐藤嘉三郎家文書 I 6)

#### 明暦資料

六兵衛	
一四百八拾四文	境田
一七百九拾六文	同所田
一八百十八文	砂原田
一百七拾七文	同所田
一七百貳拾三文	北川田
一貳百四拾九文	宮前田
一四百三拾七文	上口田
一七拾三文	同所田
一七拾四文	屋敷
一拾四文	ぎま
一百拾六文	越畑
一九拾文	利根嶋畑
一九拾四文	同所
一八拾九文	砂原畑
一六文	同所
一四文	越畑
メ四貫貳百四拾四文	

(原家文書 290)

すると意外な違いが見えてきた。まず先の慶安資料と承応資料を比べると、六兵衛の合計名請高は同じであるが、筆ごとに見ると大きく異なっていた。慶安資料中には16筆あった六兵衛の持筆は、承応資料中には僅か7筆となっている。さらに同じ字名の田地を確認しても、その貫高は大きく異なっている。これは六兵衛が、その合計名請高は同じながら、その持高の内容を大きく変えたことによるのだろうか。そこで明暦資料をみると、慶安資料と同様、六兵衛の持筆は16筆に戻っている。ただし、合計持高は、明暦資料では減少している。そこで慶安資料と明暦資料の16筆それぞれの貫高を確認してみると、14筆までは同じ字名同じ貫高であった。

残り慶安資料における830文の砂原の田と750文の北川の田が、明暦資料ではそれぞれ818文、723文となっているのではないかと推定した。そう仮定すると、その分だけ六兵衛の合計持高が微減していると考えることができる。このことを考慮すると、六兵衛家が承応資料時において、実際に大きくその持高の内容を変更していたとは考えにくい。従って承応資料が、慶安資料、明暦資料とは異なる形式で記載されていると考えた。

そこでさらに詳しく慶安資料と承応資料を見比べてみることにした。慶安資料の「きたかわ」の田の750文に、その次に記載されている「すなはら」の田の177文を足すと927文となり、承応資料の「北川田」の貫高に一致した。また慶安資料の「上口」の田二筆の貫高を足すと、承応資料の「上口」の田の貫高に一致した。加えて慶安資料の「さかい」の田2筆と「宮ノ前」の田の貫高を足すと、承応資料の「さかい」の田の貫高に一致した。ただし慶安資料の田地のうち、残りの「すなはら」の田の貫高は830文しかなく、承応資料の「すなはら」の田960文に足りない。従って慶安資料と承応資料では、六兵衛総名請高は一致するが、田地名請高は一致しない。そこで屋敷・畑地の貫高を見てみると、承応資料には、慶安資料に畑として記載があった「ぎま」と「みろくたう」分の貫高130文の記載がなく、この分を先の「すなはら」の田に足してやると、承応資料の「すなはら」の田960文に一致した。

以上から、承応資料は、慶安資料の筆を統合して作成したと考えられる。ただしその統合の仕方は、よくわからない。同字名の筆を合わせた例も見られるが、現在の上塩尻村内の字名で考えると、地理的に離れている字名の筆同士を合わせていたり、田と畑を合わせたりしている。実際隣り合った、あるいは地理的に近い耕地を合わせたというよりは、帳面上合算したようにも見受けられる。やはり承応資料の特異性が、



浮かび上がってくる。

そこで他の名請け人についても検討してみることにした。それぞれの資料の筆頭に掲載されている、与右衛門という名請人の慶安資料と承応資料の記載を記述すると、以下のようになる。

#### 慶安資料

合いノ田	
一六百五文	与右衛門
ひへ田	
一百六文	同人
きたがわの田	
一三百七拾貳文	同人
合いノ田	
一七百五拾九文	同人
やしき	
一三拾八文	同人
ざまはたけ	
一拾三文	同人
すなはらはたけ	
一八拾六文	同人
かけノ上	
一三拾四文	同人
さかいノ田	
一六百五拾九文	同人
はいづかノ田	
一五百七拾六文	同人
合いノ田	
一七百五文	同人
やしき	
一三拾一文	同人
こしはた	
一八拾七文	同人
すなはら	
一貳拾仁文	同人
ざまのはたけ	
一貳拾壹文	同人
メ四貫百拾四文	

#### 承応資料

さかいノ田 長三ツ	
一 九百拾壹文	与右衛門
きたがわ 長十二	
一 五百四拾五文	同人
あい之田 長十三	
一 七百五拾九文	同人
さかいノ田 長四ツ	
一 六百五拾九文	同人
あいの田 長三ツ	
一 壹貫八拾壹文	同人
メ田三貫九百五拾五文	
やしき	
一 三拾八	同人
ざま畑	
一 十三文	同人
かけのうへ	
一 三拾四文	同人
やしき	
一 三拾壹文	同人
すなはら畑	
一 貳拾仁文	同人
ざま	
一 貳拾壹文	同人
メ畑百五拾九文	
田畑合四貫百拾四文	

両者を比較すると、まず慶安資料の与右衛門所有筆数は、15筆であるのに対して、承応資料中では、12筆であった。ただし両資料における与右衛門総名請貫高は、4貫114文で同一であった。両資料の所有内容をさらに確認してみると、一致するものが慶安資料の15筆のうち8筆であった。さらにその他の7筆について検討すると、「きたがわ」田372文と「こしはたけ」畑87文、そして「すなはら」畑86文を足すと、545文となり、承応資料中の「きたかわ」田545文に一致する。しかし慶安資料の残り4筆については、筆毎の組み合わせでは、承応資

料の残り2筆に一致できない。慶安資料の残り4筆の合計貫高1貫992文は、確かに承応資料の残り2筆の合計貫高と一致するのではあるが。

さらにもう一人の名請人、新三郎のケースを見ておきたい。

#### 慶安資料

さかいノ田	
一 八百六十九文	新三郎
ひへ田	
一 四百八十壺文	同人
すなはらノ田	
一 六百三拾六文	同人
長走ノ田	
一 三百九拾五文	同人
とい田	
一 拾仁文	同人
せきしょノ田	
一 六百五文	同人
せきはた	
一 七百八拾五文	同人
ひへ田	
一 五拾文	同人
やしき	
一 百拾壺文	同人
ざまはた	
一 拾三文	同人
同所はた	
一 七拾仁文	同人
同所はた	
一 九文	同人
こしはた	
一 六拾壺文	同人
にゅうしぶ	
一 三百八拾四文	同人
同所はた	
一 六拾四文	同人
同所はた	

一 式拾文	同人
同所はた	
一 三拾三文	同人
ざま	
一 式文	同人

#### 承応資料

さかいノ田	
一 壺貫三百仁十文	新三郎
すなはら	
一 七百九拾壺文	同人
長走	
一 壺貫十仁文	同人
せきはた	
一 八百三十五文	同人
やしき	
一 百十壺文	同人
にゅうしぶ	
一 三百八十四文	同人
同所	
一 六十四文	同人
同所	
一 五十五文	同人

新三郎の慶安資料の所有筆数は18筆、合計貫高は4貫602文であった。これに対し承応資料の新三郎所有筆数は8筆、合計貫高は4貫572文であった。筆数、合計貫高いずれも異なっている。さらにその中身をみると、慶安資料に記載がある18筆のうち、「にゅうしぶ」畑384文、同畑64文、「やしき」111文の3筆は承応資料中にも同じ記載が見いだせた。しかしその他は見いだせなかったため、さらに検討してみたことにした。慶安資料中の「にゅうしぶ」畑20文、同33文、「ざま」畑2文を足すと、承応資料中の「にゅうしぶ」畑55文に一致した。また「せきはた」田785文と「ひえた」50文を足すと、承応資料中の「せきはた」田835文に一致した。慶安資料中の「ながばしり」「と

いた」「せきしょ」各田貫高 395 文、12 文、605 文を足すと、承応資料中の「ながはしり」1 貫 12 文に一致する。さらに慶安資料中の「すなはら」636 文に「こしはた」61 文、「ざま」3 筆、13 文、72 文、9 文を足すと、承応資料の「すなはら」791 文に合う。しかし慶安資料の残り 2 筆を足すと、承応資料の残り「さかい」1 貫 320 文より 30 文多くなる。この差が、慶安資料と承応資料における新三郎名請高の差、30 文に一致する。

さらに新三郎については、明暦資料とも比較してみたい。

#### 明暦資料

さかいノ田

一 八百七拾二文

新三郎

ひへ田

一 四百五拾六文

すなはら田

一 六百拾文

長走

一 三百九十五文

とい田

一 拾仁文

せきしょ

一 六百五文

せきはたノ田

一 七百八十五文

ひへ田

一 五十文

やしき

一 百拾壺文

ざま

一 拾三文

同所

一 七拾仁文

同所

一 九文

こし畑

一 六十壺文

にゅうしぶ畑

一 三百六十文

同所

一 六十四文

同所

一 仁十文

同所

一 三十三文

ざま

一 仁文

明暦資料での新三郎所有筆数は、18 筆で慶安資料に一致したが、合計貫高は 4 貫 529 文と承応資料よりもさらに減少していた。詳細を確認すると、慶安資料の 18 筆のうち 14 筆は一致した。残り 4 筆は明暦資料の残りの 4 筆と字名が同じであり、それぞれ 26 文、26 文、24 文減少していた。ただし残りの 1 筆は逆に 3 文増加しており、その分慶安資料の新三郎持ち貫高と明暦資料同人持ち貫高にずれが生じたものと考えられる。

それではここで改めて、慶安資料、承応資料、明暦資料における上塩尻村の百姓作り高、総筆数、名請け人数を確認しておきたい。百姓作り高は、それぞれ 204 貫 625 文、204 貫 614 文、204 貫 414 文で、それほど大きな違いはない。ところが慶安資料では 801 筆の土地が記載されていたが、承応貫高帳では 422 筆と半分近くにまで激減していた。また記載されている名請け人数も、慶安資料が 69 名であるのに対して、承応資料は僅かに 43 名に過ぎなかった。しかしながら明暦資料では再び、792 筆にまで増加し、記載人数も 68 名にまで回復している。やはり全体として、慶安資料と明暦資料はその記載方法が近似しているのに対して、承応資料のみが、特異な記載形式となっているように見受けられる。

こうみてくると、上田藩内の多くの村々に残

存し、江戸時代を通じて年貢賦課の基礎帳面であったと言われる承応貫高帳は、上塩尻村の場合、かえって位付け作業をそのまま反映しておらず、慶安資料から明暦資料にその作業結果が反映しているように見受けられる。

この明暦資料の総貫高は、上述のように 204 貫 414 文であった。ところで上塩尻村には、その前年明暦三年の免相の一部が残されている<sup>48)</sup>。これによると、村高 300 貫 250 文から万引物や永川成等を除いた百姓作分は、204 貫 414 文で、明暦資料と一致している。やはり、石直しは行っていないが、検地に相当するものが行われ、そしてその記録を基に、慶安資料、明暦資料という名寄帳が作成されていたと考えるのが自然ではないだろうか。明暦三年免相には、承応資料後 200 文永川成が行われ、百姓作分が差し引かれたことが記載されている。その後の引物が控除され、明暦資料の百姓作分 204 貫 414 文となったのである。そしてこの明暦資料に記載された田畑屋敷地貫高が、近世期を通して上塩尻村の基礎的な貫高地・貫高として継承されていった。ただし、慶安資料から承応資料へと転換した際、名請人や、貫高のまとまりである筆の合併等組み換えが広範に行われていたようだ。この承応資料時における変更を受けて明暦資料が作成されたため、慶安資料と明暦資料との間で、持ち高や一筆毎の貫高のズレが生じたのではないかと、今のところ考えている。

## 5 「分」付け記載について

寛永資料において指摘していた「分」付け記載についてであるが、実は慶安資料においてもわずかであるが残存していた<sup>49)</sup>。例えば以下の

ような記載である。

一 いくつかの田	九左衛門分
五百六十二文	兵三郎
一 みなみ田	
七百六十壺文	同人
一 かぎ田	
七百十七文	同人
(以下略)	

このような「分」を附された名請け人が、未だ 10 名存在していた。分付け主は 9 名であり、彼らの分付けした貫高は、村全体の貫高の 7.6% に過ぎなかった。

続く承応資料においては、1 名のみの記載となっていた。この例を以下に記載してみる。

つち田 長六ツ	元三郎分
一 四百八拾七文	長三郎
うつき田 長四ツ	
一 七百四十壺文	同人
石合 長六ツ	
一 八百九拾七文	同人
(以下略)	

そして明暦資料には、「分」付け記載が消滅していた。この承応資料中にみられた「分」付け記載の名請人長三郎であるが、かれは慶安資料中においても「分」付け記載であった。その時の分付主は、新蔵であった。この長三郎と新蔵は、恐らく兄弟であり、本家分家関係にあったと考えられる。従ってこの「分」という記載は、名請け人として独立はしているけれども、

---

研究がある。そこでは、彼らを従属農・隷属農と理解することが多い。しかし本論では、分付主と分付の関係を、単に支配従属の関係で理解するのではなく、嫡系成員と傍系成員からなる大きな家、あるいは本家分家・同族団論の視点から検討したいと考えている。

48) 原家文書 146

49) これまで述べてきたような「分付」や「控え」のような存在は、古島敏雄氏の研究をはじめ(『古島敏雄著作集第三巻 近世日本農業史の構造』東京大学出版会 1974 年)、多くの先行

何らかの理由で本家等の影響下にある名請け人の記載なのではないかと想定される。前掲『地方凡例録』において、「分附と云は、祖父・親の代、田畑を二男三男孫などへ譲り、其以後検地を入たる時、総領式の名を肩書に誰分として当主の名誰と記す・・(中略)・・年貢諸役も総領式へ渡し本家より一緒に勤む」とされているが<sup>50)</sup>、まさに上塩尻村の事例はこのことを示していると言える。

先に承応資料中の名請け人数が、極端に少ないことを指摘した。そして承応資料には、長三郎の他に、分付け記載されていた名請け人は、記載されていない。このことを考慮すると、承応資料においては、本家分家等家々の関係性の中で、未だ自立性の弱い名請け人については記載しなかったのかもしれない。あるいは逆に、慶安資料や明暦資料は、新たに自立しかけていた人々を、名請け人として積極的に記載する方向で作成されていたと言えるだろう。

村にとって年貢賦課・徴収のための重要な記録において、あるいは重要な記録だからこそ、資料に記載、不記載とし、年貢賦課徴収を確実にを行うための責任を明確化させようとしていたのだと考えられる。他方では近世初期における名請け人の自立の難しさ、家々の自立の不明確さ、その関係性の複雑さをもそのまま表しているのかもしれない。近世初期の土地の関係性は、それだけ錯綜した、重層的なものとして存在していたことを資料上表していると言えよう。

ただし、その「分付」記載も、明暦資料では消滅する。資料には、この複雑な関係性を記録しなくなったのである。もちろんこの重層的な、複雑な土地をめぐる関係性が、実態においてスパッと明確化したということではないだろう。家々の自立性が明確となったともいえない。それは資料に記載しなくなっただけで、近世村落の実社会においては、依然として存在していた

というべきである。この資料上の変化だけを見て、小農自立や小農家、小経営の自立を論じることには、慎重であるべきだと考えたい。

## 6 その後の土地所有

明暦資料作成後、比較的大きな改革が行われたと想定されるのは、元禄十二年(1699)である。この年『貫高指引帳』<sup>51)</sup>という資料が作成されている(以下元禄資料と略)。この資料によると、それまで開墾されてきた切起地に貫文を附し、新たに貫高地に繰り入れると共に、一方で明暦資料に記載された田畑屋敷貫高地各々の貫高を、それぞれ分引きし、若干引き下げるという措置が執られた。例を挙げると、先の六兵衛の所有地 723 文の北川の田は、この時 38 文引かれて 685 文の田となった。逆に六兵衛家では、それまで切起地であった砂原の田、畑にそれぞれ 14 文、21 文の貫高が附され、貫高地に編入されていた。新三郎持ち地においても、先の「ながはしり」田 395 文が、21 文引かれて 374 文に、「すなはら」610 文は、32 文ひかれて 578 文となっていた<sup>52)</sup>。村全体では、従来の貫高地から 11 貫 332 文が分引きされ、代わって切起地に 4 貫 941 文が設定され、貫高地に編入された。さらにこの時、土地各筆の統合や永引、堰成等による貫高からの除去が行われた結果、この時点で合計 1,096 筆の貫高地が設定された。そしてその年貢賦課貫高は、198 貫 26 文となった<sup>53)</sup>。

51) 佐藤嘉三郎家文書 I 7 この資料も、同内容のものが藤本家資料として藤本蚕業歴史館に保管されている。

52) もっともこの時点で両田地は、新三郎家の分家七兵衛家の名請高に組み入れられていたけれども。

53) 上述のように、上塩尻村には寛文十二年(1672)の「田畑切起改帳」が残されており、また寛文十三年「田畑貫高寄帳」(馬場直次郎家文書 177 or 佐藤嘉三郎文書 I 1058)という

50) 前掲『地方凡例録』下巻 110～111 頁。



またこの元禄資料には、一筆一筆に「分」記載がある。例えば以下のようなものである。

南田 金平分長三ツ三口合  
一 四百九拾五文 貳拾八文歩引 茂兵衛  
長走 同人分長六ツ  
一 貳百拾六文 拾貳文歩引  
(中略)  
さかい田 市郎兵衛分  
一 五百九拾七文 三拾三文歩引  
ひえ田 同人分  
一 拾鉢文 外永五文永川引  
(中略)  
すなはら畑 善左衛門分  
一 九拾六文 五文歩引  
小仁反田 作兵衛分  
一 三百五拾五文 貳拾文歩引  
(以下略)

この一筆ごとに記された「分」記載は、慶安資料や承応資料に記載された「分」記載とは異なっているように感じられる。どうやら各土地のそれ以前の名請け人の名前を記載しているようであった。つまり誰からその名請地が引き継がれたのかを記載しているということである。実際、元禄資料の名請け人の名請地で、明暦資料にもその名請け人の名請地であった土地については、この「分」記載がない。恐らく「分」記載の意味付けが、半世紀ほどの間に変化したのではないかと考えられる。

そしてここで各田畑屋敷地一筆一筆に再設定された貫高が、仙石氏に代わって松平氏が支配するようになった後も変革されず、以後松平氏統治時代を通じて、幕末まで年貢賦課基準として踏襲されていくことになる。具体的にはこの

資料も存在している。それゆえこの頃に仙石家は、何らかの土地に関する調査を行っているのかもしれない。しかしこの時の調査については資料の情報が限定的であり、よくわからない。

上塩尻村総貫高に、定代といわれる各村の俵数、上塩尻村では、1貫当初6俵2升を掛けることで、最も大枠の、基準となる年貢賦課額が設定された<sup>54)</sup>。七年後の宝永三年(1706)の免相(年貢割符状)においても、村高300貫250文は変わらず、そこから諸引きが行われ、年貢賦課貫高は同じく198貫26文であった。

その後上塩尻村では、18世紀に『享保十四年貫高帳』(1729)<sup>55)</sup>と『安永七年貫高帳』(1778)<sup>56)</sup>が作成された。そして19世紀には『文化七年貫高帳』(1810)<sup>57)</sup>が作成された。これらは、それまでの貫高帳同様、名寄せの形式によって、各時点で各人が名請する田畑屋敷地をそれぞれ一筆ずつ記載していた。他方18世紀から19世紀にかけて、村内の土地を一筆ずつ書き上げた検地帳形式での帳面は作成されなかった。名寄せ形式の貫高帳が引き継がれながら、名請地の確認が継続していった。近世村にとっては人々に年貢を賦課・徴収することが重要であり、その観点からすると、村内の土地一覧である検地帳よりも、名請人一人一人の名請地を記載した名寄帳による確認で十分であり、またそのほうが好都合であったとも言える。ただし上塩尻村には、19世紀に入った天保三年(1832)に『御検見帳』<sup>58)</sup>という文書が作成されている。これは、まさしく「検地帳」のような記載形式であり、田地のみではあるが、字毎の田地一筆

54) この定代は、「承応貫高帳」が作成された際に、村毎に1貫文当たりの年貢初換算率を決定したとされている(前掲『小県誌』227頁)。上述のように上塩尻村でも、慶安二年免相では、百姓作高1貫文に初7俵換算であったが、明暦三年免相では、初6俵1斗5合へと変更されていた。ただし明暦三年免相でも上納高は1,242俵であり、寛永資料時の上納高を上回っている。

55) 佐藤嘉三郎家文書I8

56) 佐藤嘉三郎家文書I9

57) 佐藤嘉三郎家文書I11

58) 佐藤嘉三郎家文書I573

一筆について、その貫高と所有者を書き綴った資料である。この時期、上田藩では藩政改革が始められており、村落に対しても、様々な新しい調査や命令が出されている。この藩政改革の一環として、新たに土地調査・確認が行われたと考えられる。ただし貫高制は継続されており、年貢賦課徴収仕法に大きな変化も見られない。土地所有を巡る大々的な変法が行われたわけではない。

以上のように上塩尻村をはじめとする上田藩においては、確かに石直しは行われていなかったが、17世紀初頭、仙石氏の統治時代に行われた位付けによって、近世的在地支配、土地支配を確立するとともに、田畑屋敷地一筆毎に年貢賦課基準である貫高を設定し、それに基づいて年貢徴収を行う仕組みが整えられた。そして最終的に仙石氏統治の晩年、元禄十二年に指引きが行われ、土地一筆一筆の貫高が確定されることとなった。これ以降明治初期までの170年余り、各田畑屋敷地に設定されたこの貫高を用いて、年貢賦課・徴収あるいは土地抵当金融や土地所有・移動が表されることになった<sup>59)</sup>。

## 終わりに

上田藩小県郡上塩尻村に残された諸資料・情報を用いて、上田藩における近世期の貫高制の確立過程について確認してきた。ここまで述べてきたことを簡単に振り返ると、以下のようなになる。

新しく上田藩主となった真田信之は、元和二

年、上田藩領において検地を行おうとした。上塩尻村においても、何らかの土地調査が行われたことをうかがわせる痕跡が残されている。その後仙石氏が上田藩主となったが、しばらくは真田家の土地所有制度を踏襲していた。しかし寛永期後半になって、仙石氏も切起地への検地をはじめ、新たに土地調査を行うようになった。上塩尻村の場合、その決定的な変化は、正保二年の帳面にその結果が記載された、「貫慣らし」といわれる「位付け」作業であった。土地一筆ごと種目、品位別に分け、しかもそれぞれ100歩を基準に、貫高が再設定された。石高制への転換はなされなかったけれども、まさしく検地に匹敵する綿密な作業、調査が行われた。そしてこの調査を基に、慶安資料、承応資料、明暦資料が作成された。それ以前、真田氏治世下の時代から続いていた入下や、「ひかへ」記載が消滅したことも合わせると、この「貫慣らし」作業は、まさしく近世的な土地所有制度を確立するための画期的な作業であったように見える。かつて内田氏や横山氏が主張されていたことではあるが、本論では、改めてその改革の重要性を強調しておきたい。

また従来の上田藩土地関係研究において、近世期を通して土地基本台帳になったと重要視されてきた「承応貫高帳」は、上塩尻村では近世期貫高制成立の流れを押し止める、あるいは変形させるように見受けられた。この点については、今後さらに検討を進めたい。

その後元禄十二年になって、それまでの土地の貫高を若干引きながら、新たに切起地に貫高を附すという作業・調査の結果を記した「指引帳」が作成される。そして調査結果を受けて享保十四年貫高帳が作成される。この一連の調査・改革の中で設定された土地一筆ごとの貫高の系譜が、明治に入って地租改正が行われるまで継続することになった。

この間上田藩主は松平氏に代わるが、松平氏は新たに検地を行い、石高制へ転換することも

59) ただしこの貫高は、もっぱら年貢賦課・徴収の側面から土地を評価しているにすぎないものであり、村役所資料等の、それに関連する場面でしか登場しない。村落社会の中では、別の土地評価の仕方、土地の表し方が存在した。上塩尻村の私家資料の中で田地についてみられる、「蒔」表記等は、それに相当するものだと考えられる。

なく、仙石氏が作った土地所有制度確立の流れをそのまま引き継いでいった。領内統治、特に年貢賦課・徴収にあたって、新たな検地、石高制への転換の必要性を、既に松平氏は感じることはなかったのであろう。

先行研究が指摘しているように、上田藩は、石高制という領外の基準と貫高制という領内の基準を併用しており、そこに何の矛盾も存在しなかったと言えるだろう<sup>60)</sup>。近世社会におけるその特異性が注目されがちな上田藩貫高制であるが、これまで見てきたような形成プロセスを経たこの貫高制は、基本的に石高制と異なる事のない制度となっており、石高制に代表される近世的な土地所有制度と相いれないものではなかったと言える。それはそのまま、近世社会における統治を可能とするものであった。そしてさらにこの制度は、近世期に展開した市場経済化にも対応可能でもあり、近世後期には上田藩の村々、特に上塩尻村の市場経済化、経済的発展を実現することになる。ただし勿論そこには、近世社会において土地を市場経済化させていくという困難を克服するための、近世的土地所有の特質が存在するのであるが、それについては、別稿で論じることにして。

## 参 考 文 献

- 上田小県誌刊行会『上田小県誌 第二巻歴史編下』（小県上田教育会 1960 年）  
上野尚志『信濃國小縣郡年表』（復刻版）（上小郷土研究会 1979 年）  
内田得平「上田藩貫高制における貫慣し」（『信濃』19 卷 10 号 1967 年）  
河内八郎「真田氏の領国形成過程」（丸山和洋編『戦国大名と国衆 14 真田氏一門と家臣』岩田書院 2014 年）  
桜井松夫「真田氏の貫高制と貢租」『上田市誌 歴史編（9）近世の農民生活と騒動』（2003 年）  
鈴木将典「豊臣政権下の信濃検地と石高制」（『信濃』62 卷 3 号 2010 年）  
同「仙石氏の信州佐久郡支配と貫高制」（『駒沢史学』90 号 2018 年）  
手塚若子「上田領における貫高制と石高制」（『千曲』79 号 1993 年）  
平沢清人「真田昌幸時代上田領の貫文制と秀吉の検地」（『地方史研究』108 号 1969 年）  
同「真田信之時代上田領の貫文制」（『信濃』22 卷 7 号 1970 年）  
長谷部他編『近世日本の地域社会と共同性』（刀水書房 2009 年）  
古島敏雄『古島敏雄著作集第三巻 近世日本農業史の構造』（東京大学出版会 1974 年）  
堀内泰「上田領の貫高制についての一考察」（『千曲』25 号 1980 年）  
丸島和洋「総論 真田氏家臣団の基礎研究」（丸島前掲書 2014 年）  
横山十四男「上田藩の貫高制」（一）、（二）（『信濃』44 卷 2 号、3 号 1992 年）

60) 前掲鈴木 2010 年